そんな世界

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そんな世界

【Ｎコード】
Ｎ８３４７Ｏ

【作者名】
Ｓｏｒａｉｒｏ　光

【あらすじ】
本物の自然を見たい、感じたい、そんな不思議系小説です。
話自体はかなり短いです。

1（前書き）

人によってはラストの描写が残酷だと思う人もいるかもしれないので一応書いておきます。
ほんの少しですが、グロテスクありです。
ちなみにこちらの小説はＰｉｘｉｖというサイトにも上げているものです。
パクリとかではありません。

1

“青い空、雲が白くて、日差しはまぶしい。

風はどことなく涼しくて、そよぐ木々はこぼれみでできた地面の柄をまた少しずつ変えていく。

日が傾いて、昼間のような暑さにも似た暖かさはなくなって、空はだんだん濃かった青から、薄い水色や淡いオレンジに姿を変えていく。

道路が湿っているようだ。

傘を振り回す小学生達が走っていく。

泥が跳ねてる。

車がすぐそばを通り過ぎていった。

また風が吹いて、泥水がはねた。

空はもう、淡い色ではなかった。

濃いオレンジで、赤にも近かった。

皆オレンジに包まれていた。

やがて空は紺色へと飲み込まれていく。

紫のグラデーションは美しく、やがて、星が瞬きだす。
今日も、星たちが瞬いて、人の頭上を照らしている。”

———そんな世界を望んでいた。

星？空？太陽？本物を見ることのなくなった私たちの体は昔の人たちと同じものを見ることはできなくなってきている。
人が作り出した合成的な光ならいくらでも見れるし、皆もう、本物を見たいとも願わない。
みんなその光が本物だと信じて疑わないし、疑おうとすらしない。
空がどんなのかなんて、もうどうでもいいのだ。
人々はもう、地上には出れない。
自分たちが汚しすぎた大気のせいで、人類は住めない環境にまでしてしまった。
地下にもぐりこんだ人間達は開発の手を止めることなく現代に至り、地下であるはずの場所に空や太陽に似せた光が存在する。

2

昔の資料を掘り返してみると、いかに自然が近く、偉大であったかがわかるような文章が発見される。
私は、いつしか『本物の空が見てみたい』そう願うようになった。
花の種類も現在より、昔のほうが多かったと見られるし、なにしろ、“雑草”なんてものがあったらしい。
雑草はどうやら芝生とは違うみたいなのだ。
そうそう、もっと前の資料によると、花粉症なんていうのもあったらしい。
現在はそんな症状を発生させるほど大量な花粉は飛んでいないし、私達が口にする食物などの草木は、別の地下室で育てられ、私達が歩いているこの見慣れた景色の中の植物達には花粉が存在しない。
木々は花をつけることも、実をつけることもなくなり、花はただ咲いては枯れるという無限ループを繰り返している。
もう、子孫保存の法則すらも失ってしまっているのだ。
「……本物の空が、見たい……。」
願ってもどうしようもないことだろう。
それは分かっているのだ。
でも、願わずにはいられない。
電子レベルを変えて……なんて世界は、もううんざりだ。
エネルギー保存の法則？　$dU = \delta Q - \delta W$　ああ、そんなのも存在したねぇ。
みんなそんなレベルの会話しかしない。
その中で生きておいて、まるでそのことに無関心なのだ。
この世界は……窮屈だ……。
今日も科学班はエントロピーがなんたらとかやっているのではないだろうか……。
ま、科学班の中でも熱力学の人たちだけだろうが。

私は歴史を掘り返していくだけ。
それだけだ。
ほんの些細なことでも見つかれば大発見だ。
例えば、絵本みたいなほんのちょっとしたことでも、だ。
そういえば、宇宙について調べていた人はどうしただろう。
ここまで科学の発展が進んでいれば宇宙への進出も夢ではないのだろうが、もはや地上には出れない状態。
ココ全てを壊して宇宙へと旅立つのは無茶な話だ。
やはり、私のようにつかめぬ宙(そら)をその手に夢見ながら無駄だとわかっていても願い続けるのだろうか？
そんなことはもうどうでもいい。
もう、いいのだ。
私は、地上へと旅立つ。
「君も、地上へと出てみたくはないか。」
「本気かい？外にでたら人類はもう生きられないのだよ。」
「……それでも私は、ココにはいたくないのだよ。」
「……それは、ココにないものばかりを望むからだろう。こんな仕事をしてちゃ無理もないが……だからみんなやめていくんだ。届かないと知っているから。」
「届かない？それは、本当かい？届かないと決め付けてるだけではないのか？」
「君は実によく働いてくれたよ。やめたくなったなら、やめてもいいんだ。」
「そうだね、私はもうそろそろやめよう。いや、今日、この場を持ってやめさせてもらうよ。」
「そうかい、上司にはそう伝えておくよ。」
私はエレベーターへと乗り込み、上へ行くボタンを押した。
一人で地上へ行くことが怖いわけじゃない。
死ぬのが怖いわけじゃない。
ただ、一生ココにいて、空が見たいと後悔しながら死んでいくより

も、本物の大気を見て、死んで行きたいと思った。
「ちょ、どこへいくんだい！？」
下のほうから、私を引き止めているのか、驚いているのか、分からない声がした。
でも、エレベーターは止まらない。
もう、とまれない。
私自身も、止まる気はもう、なかった。

3

ガタンッとエレベーターが止まった。
ココから先は、階段を自分の足で登っていかなければならない。
空気圧のせいだろうか、体が思うように動かない。
何故か、だるくなってしまう。
それでも私は突き進む。
もう、進むことしか残されていない。
戻ることは、許されない。
「うっ……ごほっ」
管理された空気、管理された空、管理された水、自然、それらはまるで無菌室にいる状態に近かった。
当然、無菌ではないが、それでも、地上に比べれば無菌室に近い。
つまり、この時点で私の体はかなり汚染されてきているのだ。
地上に出ても死ぬ、戻っても、汚染されてきているこの体に苦しみながら死ぬ。
どの道死ぬなら、もう、戻れやしない。
長い階段を登った後に、扉は目の前にあった。
鍵はもろくも腐食し、触れただけでボロボロと崩れ去っていった。
外への扉を開けたとき、どれだけひどいものが目に入るのだろうかと思ったが目の前に広がっていた景色は、あまりに、あまりに綺麗だった。
人間の住まなくなった地上は、あまりに青く、あまりに、さまざまな色で覆い尽くされ、さまざまな匂いで満ちていた。
花からは甘い香りが漂い、草からは不思議なにおいがしていた。
「う、ごほっ！！」
匂いにむせ、ほぼ無菌状態で生きていた体が異常反応を次々と示していく。
空は……オゾンだっただろうか。

そうだ、オゾンからできていて、オゾンは腐食性が高く、生臭く特徴的な刺激臭を持つ有毒物質とかだったな。
体がどんどん腐食していくのが分かる。
空がオゾンから出来ているのは知っていたが、ココまで青く、ココまで人の体を蝕むとは。
それでも、それでも私は。
ココに来れたことが、嬉しかった。
怖い？
怖くはなかった。
苦しさなんて感じる暇もなかった。
自然の摂理をこの体に感じながら私は目を閉じた。
目を閉じる、ほんの少し前に、風が私の頬をなでていった。

3（後書き）

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8347o/

そんな世界

2010年11月11日18時40分発行